

## 小曾戸洋著

## 『新版 漢方の歴史——中国・日本の伝統医学』

(四六判・並製・二六四頁・  
本体一、七〇〇円＋税 大修館書店・あじあブックス)



## 小曾戸洋・天野陽介著

## 『針灸の歴史——悠久の東洋医療』

(四六判・並製・二九六頁・  
本体一、八〇〇円＋税 大修館書店・あじあブックス)



両書は、中国をはじめとする多様なアジアの文化を一九九八年以来、十数年にわたって紹介してきた「あじあブックス」のシリーズ第七六・七七冊目として刊行された。本シリーズにおける医学史・科学史の専著としては、一九九九年の小曾戸洋氏の『漢方の歴史——中国・日本の伝統医学』が最初で、本草学を取り扱った川原秀城氏の『毒薬は口に苦し——中国の文人と不老不死』(二〇〇一年)が続き、その後しばらく途絶えていた。そこに昨年九月、『漢方の歴史』が大幅に増補改訂されて(一九六頁→二六四頁。附、年表・生薬解説・索引)新版となつて加わり(以下、『新漢方史』)、更に本年一月にその姉妹篇として小曾戸洋・天野陽介両氏による『針灸の歴史——悠久の東洋医療』(以下『針灸史』)が備わった。

まず『新漢方史』について言えば、全十章の章題は旧版と同一で、基本的な枠組みは全く変わらないが、近一五年に進捗した

文献研究の成果がバランスよく増補されており、入門書としてだけでなく、最新の研究動向を知る上でも有意義な改訂になっている。主な増補部分は、馬王堆出土医書『五十二病方』の復元研究、六朝期における本草書の継承、宋版『孫真人玉函方』等であり、資料豊富な江戸時代の記述も大幅に増補された。増補部分からも著者の書誌文献研究を基盤とする研究方法がよく看取される。

「初めての、針灸のコンパクト通史」という帯のコピーがその意義を端的に示す『針灸史』においても小曾戸氏の基本姿勢は変わらないが、いくつかの特色も認められる。

第一章「序説——宇宙と自然と人」では、宇宙論・生命論・陰陽論・五行論がわずか一六ページで分かりやすく面白く概説され、初学者にも読みやすい。

第四章「針灸の成立」では漢墓出土医書

が取り上げられ、『新漢方史』第二章「よみがえる古代医学の遺物」を補う内容になっている。漢代から六朝・隋唐の展開を書籍によつてたどる際には目録学の知識が援用されるが、『新漢方史』では『漢志』方技略から書籍分類を説くのに対して、『針灸史』では『隋志』によつて書籍の散逸・伝存が説かれる。また『新漢方史』では『孫真人玉函方』に対して、『針灸史』では『膏肓腧穴灸法』(『孫真人玉函方』に合致)が貴重な図版と共に収録される。ここからは両著の相互補完的な性格がうかがえる。

なお、『針灸史』では中国針灸通史を説き終わった後、あらためて日本針灸通史となる。中国と日本を前後に分けたのは共著故か。この部分の構成にやや難があるものの、『新漢方史』同様、書名・人名索引、関連年表まで附した充実した一冊である。

(町 泉寿郎・二松学舎大学)